
fatexx3 第三次聖杯戦争

度会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a t e × × 3

第三次聖杯戦争

【NZコード】

N3951-Y

【作者名】

度会

【あらすじ】

f a t e / z e r o を見ていてなぜか第三次を妄想してしまいました。

pixivでも書いてます。一応。

プロローグ（前書き）

二次創作なんぞ、そういう風なものに嫌悪を感じる人は「遠慮下さい。」

プロローグ

最初に断つておく。

この聖杯戦争において勝者はただの一人も存在しない。

「聖杯戦争　それは六十年おきに繰り返される七人のマスターと七人のサーヴァントの殺し合いである」

彼女たちは屋敷を出る前に先代に手渡された手紙の一文を思わず口に出して読んでいた。

「意味が分かりますか？姉さん」

「勿論あなたよりはね」

ふふ。

と彼女たちはお互いを見て笑った。

傍から見ている人間にはさぞ不思議な光景に見えることであつた。

彼女たちは笑いながらお互いを貶しあつているのだ。

もつともフィンランドのこの街に住む人間にとっては日常茶飯事の光景であり、誰も気にするものなど存在しないのだが。

仇名でもなく二人はそう言っていた。

双子と言わても方や姉は髪は茶色く緩めに巻いてあり、勝ち氣そ
うな目が特徴的だった。

そしてもう片方の妹はと、色素は薄く、目も少し眠たそうに
目じりが下がっていた。

姉に言わせると『神様はどちらが優勢な遺伝子を受け継いでいるの
か理解していたから私の方が素晴らしい
く生まれてきたのよ』といふことらしかった。

妹はそんな姉を見ても、ただの頭の可哀想な人と憐憫の眼差しを向
けるだけであつた。

そんな彼女たちなのだが、肩書きはエーデルフェルト家の当主な
である。

二人も当主がいる。

その事実は、エーデルフェルト家は一人でようやく一人前の存在な
のだと他の魔術師は陰で揶揄している
ことを彼女たちは知つていた。

そしてその噂を聞くたびに彼女たちは笑うのであつた。

「そういえば、姉さん。この間また私たちが半人前だから当主を二
人立てるしかなかつたと噂されている
のを聞いてしまいしたわ」

「あら、 その方は可哀想なお方ですね」

彼女たちはまた顔を見合させて笑つた。

エーデルフェルト家が一人も当主を立てたのはそんなちっぽけな理由などではなかつたのだ。

この二人は仲が悪かつたのだ。

いや、 仲が悪いといふ言葉を彼女たちに当てはめるのは無粋といえよ。

例によつて先代、 つまり一人の父親が当主をどちらかに決めようと決まってどちらかが不平を言い出す。

口だけなら可愛いものだが、 彼女たちは実力行使に出るのだ。

このままでは、 内紛でエーデルフェルト家が崩壊してしまつ。

そう危惧した先代がしじがなく一人に当主の座を譲えてとりあえず一人を立てたのだつた。

「ねえ、 姉さん」

「なに? 妹?」

「私ね、 聖杯が欲しいわ」

「あら、奇遇。珍しく意見があつたわね

「姉さんもなんですか？やっぱり双子ですね。気が合います。では、一時休戦ということで」

どちらも微笑みを崩さない。

「妹。それは名案ね」

それじゃ、と姉は小指を差し出す。

妹も意図を理解したのか小指を組む。

「なんだか私達仲良い姉妹みたいですね

そうね。と姉は答えると一人してフィンランドを旅立つ。

聖杯を得るために。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？
反響あってもなくてもがんばります。

プロローグ　？

半年前

彼女は冬木市にいた。

と言つてもどこからか越してきたわけではない。

ただ帰つて來たのだ。

この疎まわしき土地に。

彼女はポケットから一枚の写真を取り出して少し微笑んだ。

そこに映る少女は彼女の妹だった。

ここに戻つてくる前に母方の家に預けてきたのだ。

大切だから。

もし自分になにかあつても無事に育つて欲しいから。

妹への情は置いてきたはずの彼女だが、写真を見ると、幾分か気持ちが落ち着いた。

彼女は数年前にここを出たきり久々の帰郷となるわけだが、街並みが変わつていないことに驚いている。

そして、彼女は自らの生家辿りつく。

「LJの家は変わらないな……」

自然とそんな言葉が口をつべ。

街並みよりも変わっていない。

まるでここだけ時間が止まっているようだ。

いつまでも執拗に取り付かれた家。

彼女は自分の家、屋敷に対しても悪態を吐くと扉に手をかけた。

ガチャリと古めかしい音を立てて扉が開く。

屋敷の中にいた家政婦の何名かは彼女の姿に気づき声をかけようとしたが、彼女はそれを意に介さず目的の部屋へと歩を進める。

流石は勝手知ったる自らの家。

迷うことなく目的の部屋の前に着く。

その扉を開けようとした時体の中で何かが動くのを感じた。

久しぶりの感覚だ。

自分で得体のしれない何かが動いている。

そんな懐かしの感覚に苦笑しながら彼女は扉を開け放った。

部屋の中は電気は愚か光がどこからも入らない文字通り暗闇に包まれていた。

「久しぶりだな。臓硯」

彼女が暗闇に向かつてそう叫ぶと暗闇がその声に反応するように動く。

「久しぶりじゃの。巴苑^{ミツノ}」

彼女、巴苑は臓硯の声を聞くと嫌悪感をあらわにした。

「どういつ風の吹きまわしかの？ てつきり貴様は死んだと思つていたのにの」

カラカラと笑いながら一人の老人が姿を現した。

齡いくつになるだろうか。

巴苑には見当もつかない。

ただ、一つだけ言えるのは、臓硯は私が生まれてからずっと老いても若返つてもいいことだけだった。

そして戸籍上の、あくまで戸籍上の巴苑の父親だ。

巴苑は黙つて右手に宿つた三画の紋章を臓硯に見せる。

臓硯は、そのその紋章を見ると、ニヤリと口を歪めた。

「なるほど……どおりで、あいつには宿らないはずだ」

「アイツ?」

巴苑は臓硯の言葉に眉ひそめた。

臓硯の話によると巴苑を見離して分家の魔術的素養が高い人間に徹底的に英才教育を施したそうだ。

勿論、学問などではなく、蟲に慣れるための訓練だ。

なるほど、確かに分家の人間ならば特に問題はないだろつ。

要は適正の問題だ。

最初の御三家は聖杯戦争の参加資格を得ることが優先的に認められているのだが、全く選ばれる気配がなく不審に思つていたらしい。

「それで、その人は?」

巴苑は大して興味を惹かれたわけでもなく、ただの話を速く進める為に適当に相槌を打つ。

「それが、蟲に食べさせてしまつたわい」

カラカラカラと臓硯は笑つた。

巴苑はその声、表情、態度など臓硯の全てが嫌いだった。

幼い頃から修行と称した徹底的な蟲の凌辱。

苦痛しか残らなかつた。

幸いと云ひのが不幸と云ひのが予想以上のスピードで蟲との調整が終わつた。

その事実が臓硯を喜ばせたのが腹立たしい。

しかし、おかげで今の自分があるといつのも皮肉な話だつた。

巴苑の力を持つてしても臓硯の蟲を全て殺すことは出来ない。

死んでるモノを殺せと言つてはいるようなものであつた。

今この屋敷を全て焼けば臓硯は死ぬだろつか？

巴苑の頭の中にふとそんな考えが浮かんだが、すぐにかぶりを振つてその考えを打ち消す。

だめだ。

その程度で何とかなるんだつたら最初から魔術回路が宿つた時点で殺している。

巴苑はそつ心の中で毒づく。

腐つても魔術師。

いや腐つているから魔術師とでも言つべきか。

何度もこの体に流れるを血を恨んだことだらけ。

まあ、いい。

それも今回で終わる。

「そういえば、あのいつも貴様の後ろについてきていた餓鬼が見えぬようじやがっ！」

臓硯はそう言つと、私の後ろを見るような素振りを見せる。

餓鬼……か……。

「イツはまきつと、妹の美鈴の名前なんて一度も聞いたことがないだろ。」

魔術的素養がない人間はただの餓鬼。

「美鈴は……死んだ」

「嘘じやな」

巳苑の嘘を臓硯は即座に否定した。

そして、例の薄気味悪いカラカラと声を出して笑った。

「貴様が、あの餓鬼を見殺しにしておいてそこまで平然としている
れるわけではあるまい。それに貴様
の嘘を見破るなど造作もないことじや」

巴苑は臓硯に気づかれないように歯噛みする。

「臓硯。アンタの望みつて不老不死だつたか」

巴苑の問いに臓硯は左様。と答えた。

「人間一人の寿命だけでは根源の渦に至るには短すぎるので」

そう臓面もなく言い切る臓硯を巴苑はキッと見据える。

確かに昔は、遠い昔、それこそ目の前にいるこの群体が人間であつた頃の悲願はそうだつたのかもしない。

しかし、巴苑には今の臓硯にそんな望みは無いと考える。

死にたくない。

その妄執に取り憑く妖怪にしか見えなかつた。

「私の望みはね……」

アンタを殺すことだよ、臓硯。

「いっさえいなくなれば、あの蟲達を使って何かをするといつ」と、
ひいては間桐の家から魔術という

モノから解放されるかもしれない。

そうすれば、美鈴をこんな田にあわせなくて済む。

「力カツ。中々不穏なことを考えていそうじやの巳苑」

臓硯はそう言つと、巳苑に背を向けた。

「貴様には、まだ利用価値がある。長旅で疲れたじやうりつ。どこかの部屋で休んでおれ」

そつ言つて臓硯はまた暗闇に包まれた部屋の中に溶けていった。

巳苑は昔自分の使つていた部屋の扉を開けた。

そこは家を出でいつた時と変わらぬままだった。

長年使つていたベッドに横たわる。

暫く使つていなかつたせいか埃が舞つた。

巳苑は趣ろに自らの手を天井に伸ばした。

「久々に出てきなよ蟲共」

巳苑の声が合図となつたのか、挙げられた巳苑の腕の方に向かつて何かが巳苑の体の中を進んでいるかのように皮膚が盛り上がる。

そこから這い出た蟲は、大小様々でまた形状も一つ一つ変わつてい

た。

「ウウウ」とつわつたいくつも羽音を立てる蟲もこれば、地面にベタリと點りついたままの蟲もいる。

彼らは蟲であつて虫ではない。

全て自然界に存在する昆虫とは遠くかけ離れた存在だ。

「この蟲共を体に入れて早二十年余り……そら」「いつらも私を認め
るわけだ」

元々、魔術の才能を色濃く受け継いでいた巳苑の体は蟲達にとつてはまさに御馳走のようなものであり、いくら蟲に知能がないとはいっても、長年付き合えば共生という関係が生まれるのも自明の理である。

おかげで彼女が蟲を行使する際に感じる痛みや悪寒などはほぼ、存在しなかつた。

蟲たちは私の言つことを理解してくれる数少ない生命体だ。

「もし……」の蟲達を例えれば一年や二年で制御しきつたやうなれば、それこそ地獄を見なきやならん

だらうね

でも、そんな考えは杞憂か。

そう考えて巴苑は被りを振つた。

「だつてこの醜い聖杯戦争は、私の代で終わるんだからね。だから、他のマスターってのには悪いけど死んで貰いつ」

闘いに犠牲はつきものだ。

そうだよね。と妹の顔を思い出し、笑顔で虚空にそう問いかけると巴苑は規則正しい寝息を立て始めた。

プロローグ ? (前書き)

こんばんは。

見て下さってくれる方には損をさせないようこ頑張ります。

プロローグ　？

三か月前

イギリスのある屋敷の中では軽快な鼻唄が聞こえていた。

その鼻唄の主は、上機嫌なのを隠すこともなく、すれ違う使用人達にも笑顔を振りまいていた。

鼻唄が似合つと言つては本人に失礼かもしれないが、鼻唄と着ている赤黒いドレスが良く似合つていた。

そして、その鼻唄の主は歩みを止める。

「あら、お姉さま、これからどうかへ行かれるのですか？」

お姉さまと呼ばれた女は感情を込める事なく、仕事と言い放った。
「私の所の仕事も、それから姉さんの所もこれから忙しくなるから、
メイルには構つてやれないのよ」

「ごめんね。と姉は彼女、メイルの頭を一撫でするとせわしなく足早にその場を去つた。

メイルは姉達の仕事の詳しい内容を知ることは出来なかつたが、恐らく軍需関係の仕事なのだつと当たりをつけっていた。

「この時代に忙しくなる職業など数えるほどしかないからだ。

メイルは機嫌のいい理由である自分の右手を見た。

そこには幾何学的に描かれた三画の模様が浮かんでいる。

それは即ち聖杯に選ばれたといつ証明に他ならなかつた。

この令呪が刻まれたのは今朝のことだ、何か鈍痛がすると思い手を出してみるとこの令呪が刻まれていたのだ。

「60年に一度行われるこの度の戦争。我が名門アメジスト家がいただくとするわ」

アメジスト家は5代続いた魔術の家系であり、父は時計塔に勤めていた経験を持つ魔術師会では名の知られた家系だった。

メイルの上には一人の姉がいるが、どちらも少しは魔術を噛んだがやがて使い道を見いだせずにそれぞれ魔術師ではなく他の職業に就いていた。

この代で魔術師としての血は途絶えるのかと父親は危惧していたが、三女であるメイルは父親の才能を受け継いだのか魔術の才があつた。得意とする魔術は、『先読み』。中国武術などでは相手の呼吸を読んで次の一手を読むらしいが、メイルはそれを対魔術師に改良したものである。

メイルの眼は相手魔術師が魔術を使う瞬間に、相手の体のどこかの部

位に魔力が集中しているのかを見定めることが出来た。

「幸いなことに、この聖杯戦争にぴったりなサーヴァントを呼ぶ触媒は揃つてゐるよね」

メイルが上機嫌な理由は令呪を得ただけだからではなかつた。

このアメジスト家にはメイルが生まれる前からこの家にある秘宝と呼ぶのにふさわしいものが存在していたのである。

そうまさに聖遺物と呼ぶのに相応しいシリアで見つかった秘宝をメイルは触媒として使用する腹積もりであつた。

「さて、それはそつと、冬木に行く準備をしなくちゃね。あれはどこかしら……」

メイルは意気揚々とスーツケースに荷物を積む。

作りモノの聖杯を持ちかえるために。

プロローグ　?（後書き）

何かあれば遠慮なくお願いします。

プロローグ　？

一ヶ月前

「どうにも、お前さんは神さまに愛されてるのかねえ」

「そんなことないよ、ぱあわら。ただ単純に運でもあつただけさ」

寂れでいると言つても差支えない村の中でそこまで大きくもない家の中で男と老婆が話をしていた。

老婆の方は細く力を込めてしまえば折れてしまいそうな位であった。

それに比べて男の方は日本男児にしては背が高くがつしりとした時代が時代なら武蔵坊弁慶に並ぶかと言つほどの巨躯だった。

男は、自分の荒れた指を眺める。

徴兵されてからというのも海に出ることはあっても魚を捕つたりすることは無くなってしまったな。と自らが積み上げた経験が無に帰るような気持ちがして少し哀しくなつた。

男は漁師だつた。

父の背中を追つて海に出た。

そして二十歳になる頃にはこの村周辺でもその名前を響かせるほど

の名手になっていた。

「もつ俺が魚を捕ることはないのかもな」

田の前の老婆に聞こえることなく男は呟いた。

男は荒れた指から視線を自らの手の甲に移す。

そこにはいつ出来たか分からぬ傷があつた。

擦つても取れないのだから刺青に近いものがある。

男の名前は権藤統一と言つた。

彼は本来聖杯戦争とは全く無縁の人間であつた。

恐らく彼は自分にこの刺青が宿るまで聖杯戦争のせの字も知らなかつたことに違ひない。

統一の背中には首から尻にかけて大きな刺青があつた。

これは勿論統一自身がいれたものではない。

まるで人体の血管と神経を模したような模様。

その刺青に理由についてはこの村では伝説にもなっていた。

まだ、統一が、少年だった頃、と言つてももつ船にも乗つていた時のある日のこと。

彼の乗つていた船が嵐に見舞われ難破した。

当然統一も投げ出されて、体は海深くに沈んでいった。

そろそろ息も持たなくなつてきてここまでかと統一が人生を諦めた瞬間。

海の底に光る社を見つけた。

統一はその光が気になり、最後の力を振り絞つてその光に触れた。

目を覚ました統一が気づくと浜辺に打ち上げられていた。

しかし、立ち上がる氣力すらなくただ倒れていた所を村人に一人が発見して偶然にも助かつたのだった。

統一は持ち前の体力で暫く寝ると快復したのだが、背中に大きな傷が出来ており、その傷だけだいつまでも色濃く残つていた。

それが現在の刺青なのだ。

統一がその話を村の長老達にすると、長老たちは口を合わせてこの村に古くから伝わる水神の加護だと言った。

加護を受けてからというもの、背中の刺青に精神を集中させると普段持つことが出来ないような重い物

を持ち上げたり、速く動くことが出来るよつになつた。

その力を行使する度に背中が熱くなるのを感じた。

そして、右手に謎の刺青が宿る前の晩奇妙な夢を見たのだ。
海の水神と名乗る昔話によく出てくる精靈のよつな風貌をした老人
が統一の前に現れたのだ。

『お前はまもなく聖杯にマスターとして呼び出されるだらう。その
時お前に授けた魔術回路がきつと役
に立つだらう』

『お言葉ですが水神殿。聖杯戦争とはなんでしょうか……』

統一がそう質問すると老人はにこやかに笑い、統一はまた光に包ま
れる。

光に触れた瞬間統一は全てを理解していた。

聖杯戦争、マスター、サーヴァント、そして魔術師と呼ばれる存在
がいること、そして己の体に宿つた

背中の刺青の意味を。

そして全てを理解した上で統一はその老人に向き直つた。

『水神殿あなたは何を望むのですか?』

『そつさのあ……またこの水神信仰を蘇らせて欲しいかの』

欲のない神様だ。統一は素直にそう思った。

恐らくその願いもこの神にとつてどうでもいいようなことだらうといつ印象を受けた。

『承知しました。あなたに助けていただきたいこの命あなたの為に使いましょう』

統一がそう言つと、急に目が覚めた。

夢だったのか。

それにしては随分とリアルな夢だった。

統一は寝床の横に古びた木片があるのに気がつく。

それを手に取つてみる。

統一の船に使われている材木ではなかつた。

それにこの木片が俺が落としたものにしては、古すぎる。

その木片はほぼ崩れかかっていてともすれば霧散してしまいそうだった。

ただ、この使い道もない「ミミ同然の木片を何故か統一は捨てる」とが出来なかつた。

「もしかしたら、水神殿が私の為に触媒でも置いてってくれたの

かもしだいな

統一は自分の夢のような妄想に少し笑みを漏らして、手ぬぐいにその木片をそつと包むと、机の中にそつとしまった。

第三次聖杯戦争開幕

360・00・00

「少しいいですか？神父？」

遠坂幹継は静かに聖堂教会の扉をノックした。

「もうそろそろ聖杯戦争が始まるのに中立的立場である監督役の下に訪れてよろしいんですか？」

今回聖堂教会に派遣された神父、言峰璃正はそう厳かに言つて。

「別に知り合いの所に訪れて何が悪いのだろうか？」

そう言つと、幹継は持つてきた自前のワインを璃正に向かって見せる。

その酒を見て、璃正はならば仕方がないな。と幹継を教会の中に招いた。

「他のマスターの情報はどうなつていてる？」

部屋に入つて開口一番幹継はいきなり核心を尋ねた。

ふむ。璃正は「めかみ辺りをコンコンと叩く。

「今、申告されているマスターは一人。権藤統一だけです。どうやら彼は魔術師ではないそうですが」

璃正の言葉に幹継が噴き出す。

「まさか、この薦高き聖杯戦争という場において魔術師にもなれない一般人がなんと一人も。どうやら聖杯は遂にこの遠坂に跪くのか」

「これは傑作だ。

幹継は上機嫌にワインを飲み干す。

「そうですか。私には魔術のことは理解しかねるのでそのようなことは分からぬのですが。もう一人の「方權藤統」という人間ですが……」

そこで璃正は言い籠つた。

「どうかしたのか璃正？その権藤という人間は何かあるのか？」

「いえ……ただ、魔術の素養もなく、師事したこともない人間という申告でしたのでその通りに書き記しておりましたが、素人考えでも少し疑問点があります」

「どうこうことだ？」

「はい。考えてもみて下さい。聖杯が何も魔を操る術を持たぬ人間を選ぶのでしょうか？」

「ふむ……」

幹継は少し考えるような素振りを見せていたが、やがて考えるのを

止めた。

「例えどのような人間でもこの遠坂の敵ではないぞ」

そつ言ひつと両手を大仰に開く。

その余裕こそが遠坂家の家訓であるらしいが、その余裕が足を引っ張らなければいいのだが……

「時に、璃正。靈器盤に向か反応は無いのか?」

靈器盤とは専任司祭に「えられる英靈のクラスを判別する測定器のよひなものである。

これにかかれば、マスターは判別出来ずとも既に現界しているサーザントは分かるはずである。

「そうですね……今現界しているのは……」

そこで璃正の言葉が止まる。

それを不審に思つたのか幹継も靈器盤を覗いてみた。

すると、一つの光が所々重なつてゐる様子が見えてゐる。

「これはどうこいつ」とだ……璃正?」

「どうやら……器械の故障かもしません。しかし、この反応はバー サーカーで間違いないかと……」

璃正にしては珍しく歯切れの悪い回答だ。幹継は旧友の珍しい反応に目を丸くしていた。

「しかし…バーサーカーか

どの程度の英靈を狂化させたかによるが分からぬが、マスター次第では非常に厄介だ。

「まあ、全ではこの遠坂の前に跪くのだからな」

教会の中に幹継の笑い声が響いていた。

350・45・40

「いよいよか……」

アインツベルン城の片隅で彼女はそう呟いた。

魔術師達がこの冬木の街に集まつてきているのを感じる。

今晚にでも七人のマスターとサーヴァントが集まつて聖杯戦争が始まるのである。

彼女、ケルベスフィール・フォン・アインツベルンは、失敗作である。

体に欠損はなく、むしろ作られたと聞けば納得してしまつような姿に赤い目が印象的な彼女は重ねて言

うが失敗作である。

全く、失敗作と言われた身にもなつて欲しいのだが。

恐らくアインツベルンからしたら、せっかく作ったのだから勿体ない。程度の考えで私をマスターに指名したのだろう。

失敗作というのも、あの人達からしたら失敗なのであって、当人としてはなんら不自由もない。

私には感情があるのでした。

本来アインツベルンは聖杯戦争を行うマスターに感情など不要。

と考えているらしく第三次聖杯戦争のマスターはロボットのようこの感情を無くし魔術回路を詰めこむという試みのもと造られたらしい。

らしいといふのはケルベはそう聞いていただけだからだ。

人間までとは言わないうが、それなりの感情を持ち合わせており、泣いたり笑つたりすることが出来てしまう。

それを失敗だと決めつけたアハト翁などは一度たりともケルベに会おうともしなかった。

「全く酷いやつだよな。なんだっけその……」

「アインツベルン」

「そつそつアインツなんとかって奴ら。作るだけ作って失敗したら
ポイかね」

暗闇から男の相槌が聞こえる。

「まあ、アインツベルンってのはそういう家系だからしうりがない
わよ」

ケルベは半ば分かっているような諦めたような心情を吐露する。

「俺のマスターにしては随分とまあ湿氣てるなあ……」

お前もそつ思うだろ?と何かを叩いていながらケルベからは何も判別がつかなかつた。

「それで私はあなたをなんて呼べばいいのかしりっ。」

「そつだな……」

暗闇の中の彼は考へてゐるようだつた。

「シンプルに復讐者 アヴェンジャー でいいんじゃないか?」

「そつ、ならアヴェンジャー。聖杯でも取つてアインツベルンの連
中でも見返しますか」

そつ言つてケルベは身近にあつた本を一冊取ると床に投げる。

突如としてケルベの髪がふわりと揺れる。

暗闇から光が一チカツチカツと見えた。

次の瞬間分厚いハードカバーの本が真つ一つになりそれぞれが壁に突き刺さった。

本に刺さっていたナイフは一つが一つとも禍々しい形をしていた。

彼女が本を投げたのと同時に権藤統一は砂浜の上にいた。

「なるほど。全ては神のお告げか」

儀式とやらに必要なものはとりあえず調達しておいた。

あとは夢で見た通りのことを行えば問題はないだろう。

「あー。閉じよ みたせ 。閉じよ みたせ 。閉じよ みたせ 。
閉じよ みたせ 。閉じよ みた

せ 。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ。降り立つ風には壁を

遡ること三十分前。

間桐巳苑は間桐家の蟲藏で召喚の魔法陣を準備している途中だった。

「相変わらず、汚い場所だな」

こんな機会さえなければ一度と入りたくない。

それに臓覗と一緒にいるのが更に巳苑を不快にさせた。

「術の詠唱もなにもかも問題ない。だから出ていってくれないか?」

巳苑が悪意を込めた視線を臓覗に送るが、本人はどこ吹く風のよう

にカラカラと嗤つた。

「冗談を言つた巳苑。こんな面白いもの滅多見れるものではないの

だぞ」

そう言つてどこかに行く様子も見えなかつたので、巳苑は深くため息を吐いて儀式に集中することにした。

「

彼女は願うつ英靈に聖杯に、この御身に流れる血の根絶を。

「まったくこんなぎりぎりに私達の住まいが出来るなんて私達ずいぶん災難ですね。姉さん」

「そうね。あなたが私のセンスを疑うから余計に時間がかかってしまつたわ」

「そうなんですね。まさか姉さんが私のセンスを理解してくれださらないから驚いてしまいました」

かの双子も冬木の街にいた。

彼女達は他のマスターの候補達よりも先にこの街で拠点となる住処を作っていた。

名前は『双子館』

その名が示す通り屋敷に左右対称に二つ家が繋がっているカタチである。

見た目こそ同じだが、お互いがお互いのセンスを受け入れられないために内装は完全別物である。

「さて、そろそろ私、サーヴァントを呼び出さなければならぬのだけれど?」

「妹。それは私の役目よ?なんて言つたつて当主はこの私のみなのだから」

「可哀想に。未熟な自分の論理の中でしか生きることが出来ないみたいね。ならこうしましょ。一人で儀式を行いましょ」

「二人で?」

儀式を行えるほど魔力が溜まっている場所はこの館には一つしか存在しなかつた。

新に探すほど悠長なことは言つてられない。

「はい。もしかしたら違うクラスのサーヴァントが同時に現れるかもしれませんよ?」

「そうしたらいきなりあなたを殺せるのね？妹」

「はい。私が姉さんを殺すことが出来ます」

笑みを崩すことのない彼女達は一人して双子館のメインホールに現れた。

「 」

二人はゆっくりと詠唱を始める。

何を望む？

全てを。

英靈に。

聖杯を手に入れるため。

「 」告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ 」

巴苑の中の蟲が珍しく活発に術者の体の中を這いする。

滅多に消費しない量の魔力を消費しているからであろう。

しかし、今の巴苑にはその痛みすらも快感に感じられた。

「誓いを此処ここに。我は常世総ての薬と成る者、我は常世総ての悪を敷しく者」

巴苑は途中で妹の顔を浮かべる。

もうすぐ終わるから妹には全うな道を生きてもりたい。

それだけが悲願だった。

物事には犠牲がつきものだ。

6人のマスターとサーヴァントの命で足りなければ自らも差し出そう。

メイルの詠唱も最終段階に入っていた。

聖遺物はこの戦争の命題である聖杯である。

聖杯の名前を『冠すほど』の英靈はそういうない。

いざれにしても『彼』を召喚出来れば勝てないわけがない。

メイルはそう踏んでいた。

「 汝三大の言靈を纏まとひ七天、抑止の輪より来たれ、天秤の
守り手よ ！」

最後の一節まで言い切るとメイルはよつやく一息ついた。

全ての詠唱は終わった。

後は聖杯の仕事だ。

彼らの願いは無事英靈と呼ばれる者達に通じ、各自の魔法陣の中に
は人影が現れる。

遙か時代を超え、数百年、数千年あるいはこの世ではない世界から
招かれた存在。

魔法陣が時々雷を帶びてバチッと白く光る。

辺りに民家があつたらボヤ騒ぎと通報されるくらいの煙だった。

その現象の一つ一つが召喚された英靈の凄まじさを物語つてゐる。

そして、あまねく場所で召喚されたサーヴァントといつづの英靈達
は一様に自分の眼前にいる人間に問
う。

「問おう、汝が私のマスターか？」

開幕 ? (前書き)

少しでも田を通してくれる方がいて下るので嬉しい限りです。

「あはは」

メイルは誰に向けてでもなく笑った。

どうやら召喚は委細なく成功したらしい。

「問う。あんたは俺のマスターか？」

魔法陣の中には赤い鎧に身を包んだ騎士がいた。

女性の中でも平均的な身長の枠を出ないメイルはその騎士を見上げる形になる。

やはり英靈、とりわけ聖杯を依代としただけあって対峙しているだけビリビリと何かを感じた。

「ええ、私はアメジスト・メイル。あなたのマスターよ

メイルがそう言つと、赤い騎士はなるほど。と頷いた。

マスターが目の前にいる人物だと分かり、少し氣を抜いたのだろうか。

感じるフレッシャーみたいなものが幾分か和らいだ。

「いや、まさか聖杯戦争つて戦争があるなんてね。随分と豪氣な名前をつけたものだよ」

赤の騎士は自分の言葉に納得するように頷く。

「でも、メイルが抱いていた人物像と少しがけ離れていた。

そこで不安になつたメイルは赤の騎士に問うた。

「あなたの名前は ね？」

すると、赤の騎士はおう。と頷く。

「いかにも、俺は聖杯の騎士と呼ばれている。この度の戦ではランサーのクラスで現界している」

「あなたランサーなの？」

「やうだな。きっと俺よりも相応しい奴がいたんだろうぞ」

なんせ世界は広いからな。とランサーは肩を竦めた。

メイルは契約したマスターとしてランサーのパラメータを眺める。

普通。と言つては悪いが、聖杯を依代として現界したのならもう少しパラメータが高くてもいいだろう。

それこそ特例で全てのパラメータがAになつてもいい位のことメイルは毒氣づく。

「まあまあ、相手さんだつて伊達に神話に生きてたりしないんだから、流石にそこは補正からなかつた

んどしょ「う」

全く随分氣楽なランサーである。

それについても幸運Aとこののはランサーにしては珍しい氣がする。

ランサーは三騎士として数えられ、抗魔力などのスキルが付『されるが、どうにも不運と呼ばれ過去一回の聖杯戦争においても例外なく幸運はEランクだったはずだ。

「まあ、運も大事な要素よね」

もしかしたら、EのスキルをAまで変えたことが聖杯なりの精一杯の加護だったのかもしれない。

「とつあえず帰ろうかしら。ランサー靈体化して付いてきて」

あいよ。とランサーは軽い返事をすると、スウッと血の肉体を靈体に変えて姿を消した。

メイルが構えた本陣は召喚した場所からそう離れていない郊外にあつた。

魔術的には不利かもしけないが、日本に興味があつたメイルはその不利を飲みこんでまでこの日本的な家屋にしたのだ。

「ほう。意外に日本的な所に住んでいるのな

「そうよ。一度空き家になつてたみたいだから勝手に使わせてもら

「う」としたの

そつ言つと、メイルは得意そつに薄い胸を張つた。

「俺も欧洲の方だから、こいつの家屋は初めてだが、どうしてここの國の人間はここまであけっぴろげなんだ」

メイル達はその家屋の中を何かないか搜索していた。

部屋のほぼ全ては草で編まれた畳というものが敷かれており、木の匂いが心地よかつた。

「まあ、マスター。なんかあつたら知りせてくれ。俺はこの畳で寝てる」

「なつ……」

メイルは一瞬なんの冗談かと思ったが、ランサーは本当に実体化したまま畳に横になつて寝息を立て始めた。

実体化するために必要な魔力もメイル自身が供給しているのになんて自由な。

と一瞬激情に駆られたが、自分はマスターなのだと令呪を見て思い出し、からつじて溜飲を下げる。

「ふう」

一時間ほどこの屋敷を搜索してみたが特に収穫はなく、前の持ち主も暫く使っていなかつたということしか分からなかつた。

メイルはとぼとぼとランサーの寝ている部屋の扉を開けた。

まだ、ランサーは寝ていた。

スースーと規則正しい寝息をたてている。

メイルはそれがどうしようもなく我慢出来ずにランサーの体を蹴ろうと足を振りあげ

「え？」

その振りあげた足はランサーの体に届くことはなかつた。

気がつくとメイルの体は宙を舞い一瞬の内にランサーによつて地面に叩き伏せられていた。

メイルの顔の真横にはいつの間に取り出したのか槍が刺さつていた。

「ん？ ああ、なんだマスターか」

「いや、どうも寝ている時に敵意つてのを感じつけつつ、反射的にやく視認したらしく。

「いや、どうも寝ている時に敵意つてのを感じつけつつ、反射的にな」

悪い悪いことランサーはメールの上からビートた。

「な、なかなかやるじゃな」ランサー

プライドが高いメールはびっくりして軽く漏れたなど口が裂けても
言えなかつた。

3 4 0 : 3 0 : 2 1

「よつと」

朝五時、統一は久々に漁を行つていた。

全く久々すぎてつい氣合いが入つてしまふ。

統一は釣りあげた魚を慣れた手つきで船の甲板に投げる。

船はこの街に来る時に乗つてきた物で、そこまで良い船ではないが、最低限のモノは揃つていたのでこうして海の方に出てみたのだ。

「流石だな」

「まあ、餓鬼の頃からやつてるからな」

現在小舟に乗つているのは統一を含めて二人。

いや正確を期すならば、マスター一人とサーヴァント一人だった。

「しかし、触媒があんなものでこと足りるとはな

一段落したので統一はサーヴァントの方を向く。

「ああ、あの木片は我が最高の船アルジェリアンの船体の一部だ。

私にとつてはそれをあんたが持つていたことが驚きだ」

統一の前の女性は頷く。

「これは水神殿に貰つたのだ」

「水神? ああ、あなたの背中にけつたいな刻印を彫り込んだやつか

そうだ。と統一は答えた。

最初にここが召喚された時に思わずそのままの田つきに圧倒された。

鷹のよつに鋭い目。

痩身といつに相応しい体躯に統一に並ぶほど背丈。

もじこの時代にいたら間違いなく惚れていただらつ。と統一は少し場違いな考えを抱いた。

「この赤髪と呼ばれた海賊王を呼び出すとは、中々目が高い。この聖杯戦争の霸権は私達の手に収まつた

も同然だ」

「あつとやう言つ奴ばかりが呼び出されてるんだらつな。えつと…

…

「ハイレディン。呼びびらかつたらライダーと呼んでもいい

要は私が私と認識出来る名前で呼んでくれれば全く問題ない。ライ

ダーはそう言った。

ライダーは話ながらも着々と甲板に増える魚をじっと見る。

「ひつひつちや悪いが、あんたは漁師のままの方が良かつたんじゃないか?」

その言葉に、ハハと、統一は苦笑する。

「全くそうは思うが、一度死んだ身だ。恩人に報いるのが日本人として筋じゃないか」

「いや、私は日本人じゃねえし、そういう美学つていつのつかからないがそういうのは持ち合わせちやいない」

「やうか、流石海賊王だな」

統一はそう言って笑うと、突然竿を仕舞い始めた。

「どうした?」

「なに。そもそも取り過ぎだ。魚も生き物だが、海つてのも生き物だ。何事もほどほどがいいんだよ」

「あんたがその水神とやらに巻かれてるのが分かったわ……」

「これからどうある? 手つ取り早くそちら辺の奴ら殺すか?」

「これからどうある? 手つ取り早くそちら辺の奴ら殺すか?」

ライダーはにこやかにそんことを言つた。

馬鹿を言つた。と統一がそれを窘めた。

「ハハハ、この闘いは先に自分の能力がバレた奴が負けでいくんだよ。特にアンタなんて前に出たら一発でバレるだろ？」

統一の意見が意外と的を得ていたようで、ライダーは、なるほど、そういうことが…と納得したように頷いた。

「しかしだな……機を見つければすぐ攻める

要は漁と回じだ。

統一はハハハと空を見上げる。

これから起きた戦争のことなど知らないうつむき空であった。

「ハハハ、アンタって何か聖杯に願うことあるのか？」

統一の問いにライダーは勿論と答えた。

「当たり前だ。じやなきやあんたなんかに召喚つてか呼びだされる義理はない。私の望みはね、全世界に

」

「なるほど全世界の海を支配すると」

「まだ言つてないんだが？」

「違うのか？」

違わないさとライダーは口を尖らせて言つ。

「俺は、その願いこそが俺とアンタを引き寄せたと考へていい。俺の願いも似たようなものだ」

なに？ライダーはそれを聞くと途端に興味が湧いたのか統一に向かって好奇の視線を投げかける。

「ほう。ならば、一人でこの戦いが終わった後、侵略戦争でもけしかけるか？」

「やうだな。そこまで出来たら上等だな

統一は浅瀬になってきたので船から降り、自らの手で船を押す。

「…………あ

「なんだライダー」

「ひひつて、もし狙撃されるなら一番それやすいよな。とか思つた

その言葉に統一はぎょっとして辺りを見回す。

迂闊だった。

もつ血分はそういう世界にいるのだという認識がまだなかつた。

もし、今狙撃されていたら、なんの願いも果たすこともなく幕を閉じるといひのであつた。

「ライダー。恩に着る」

「なに。さつきからスコープ越しに誰かに見られている気配がしてね」

やつぱりライダーはある一点を見つめる。

釣られて統一もやぢらを見るが、特に何かを視認出来たといつわけではなかつた。

「気配が消えたか……。逃げられたな」

まあ、いい。とライダーは浜辺に腰を下ろす。

「すぐに事は起る。気長に待つとしようか」

そう言つと、ライダーは砂浜に寝転び空を見つめた。

339・40・32

「チツ」

ガブリール・アダモフは地面に向かつて唾を吐く。

油断していた。

流石は英靈と言つたところか。

かなり離れていた距離から見ていたはずなのに気付かれた。

マスターの方には全く気付かれていなかつたのでこれは早々に決まるかと思つたがどうも上手くいかないものだ。

「まあ、簡単に決まつてしまつてはそれはそれでもの悲しいものだな」

アダモフはポケットからドロップを取り出し口に含むとガリガリと噛み砕きながら食べた。

アダモフの風貌はこの時期の冬木においてはそれなりに田を惹くのだろう。

たまにすれ違う人々の視線を感じる。

しかし、アダモフはその視線を一切気にすることなく歩き続ける。

「全では、ツアーリの勝利の為だ……」

誰に言ひのでもなくそつ咳くと、アダモフは古びた家屋の中に足を踏み入れた。

中も外と変わらず最低限の生活を過ぐす程度の機能しか持つていないうだ。

「ツアーリ。やはりこの鬪い一筋縄ではいかないようですね」

アダモフが恭しく頭を下げたその先には大柄な男性がいた。

正確にはツアーリだったという表現が正しい。

彼は、自分で作ったのかこの古ぼけた家屋にそぐわぬ豪奢な椅子に座つてアダモフを見下ろしていた。

「そつかそつか。分かった。御苦労だった」

彼はおもむろに椅子を離れると外を見るよつこ窓をやつた。

「この冬木という地まだ見知らぬ土地ではあるが、どうにも持つている魔力が他の街に比べて幾分か高いようだ。これなら工房を2・3個作ることも造作ない」

クククと笑いを噛み殺したような声を上げた。

「しかし、ツアーリがキャスターのようなクラスで召喚されるとほ

思つてもみなかつたです』

アダモフがそう言つと、キヤスターは口を歪めた。

「どうにも、他のクラスも埋まつておつたし、一応儂は一時期魔術の類に興味を持つたことがあつてな」

あれは余りにも短い期間だつたから史実を読んでも出てこないだろうな。とキヤスターは答えた。

「それは、我が先祖代々に伝わる書物に書かれておりました。『我ガツアーリ イヴァン4世は死刑にした人間の体を使って新しい人間を精製する術などを一部に人間に研究させ、自ら使用してオブリーチーナに活用したと』」

アダモフの言葉を聞くとキヤスターは物凄く愉快そうにハハハと声を出して笑つた。

「どうか。アダモフ。貴様は儂の部下であつたアイツの子孫にあたるのか。言われてみればなるほど確かに田つきと体つきは似てゐるな」

恐縮です。とアダモフは頭を下げる。

「しかし、ツアーリ。時代は進化しました。私はあなたの傍にいた時の我が先祖よりも格段に強くなりました」

そう言つとアダモフは肩にかけている銃をキヤスターに見せる。

「ほう……儂の時代に比べて格段に性能が上がつてそうだな」

関心したようにキャスターは銃を眺めた。

「これさえあれば、ツアーリの手を煩わせることすらありません」

「ふむ……」

キャスターは何かを考えるように顎に手を置いていたが、やがてアダモフを見据えた。

「アダモフよ。貴様はマスターだけ狙え」

「と仰りますと?」

「ふむ。まず第一にこれは貴様も知っているだろうが、儂らサーヴアントは大抵の攻撃は効かぬ。それに当たつたとしても大した効果は得られない。それに比べてマスターはただの人間。銃弾一発で仕留められる」

「なるほど……」

「第一に、といつても、これが主たる理由なのだが……。お前が倒してしまつては儂が殺せないじやないか

キャスターは豪快に笑うと靈体化して姿を消した。

320・00・53

「ふう……」

幹継は召喚が成功したことに安堵してため息を吐いた。

結果は上々だ。

あのレベルの英靈を呼べるマスターなど他にはいないだろう。

召喚した幹継でさえ狡いと呼べる位に強力なのである。

これなら、妻と子も家に置いておいても構わなかつたかもしれない。

「アーチャー」

幹継がそう呼ぶと、突然幹継の眼前に巨躯が現れた。

おおよそ人間と呼ぶには大きすぎる、実在した人物とは到底思えない。

さながら、お伽話に出てくるような巨人であった。

「いかがなされたかマスター」

その巨人は恭しく頭を垂れる。

普通の人間であればこれほどの巨人を意のままという事実だけで昂

ぶつてしまつだらう。

しかし、遠坂幹継という男は眉根一つ動かさなかつた。

幹継は仮にどのような英靈であれ、マスターとサーヴァントなのであり特別な感情を抱く必要もないと感じていた。

「IJの屋敷の周辺に不審な奴はいたのか？」

「委細な……」

ぐ。とアーチャーが呟くと幹継は庭先を見に行くよつた様子で

「ふむ。何者かが早速訪れたよつだな」

出でんアーチャー。そう言つと幹継は庭先を見に行くよつた様子で椅子を立つ。

「宝石及びその他の準備は十全だ。この遠坂の敷地内で戦うことを後悔するがいい」

幹継が庭先に出ると、そこには黒い何かがいた。

アーチャーに比べれば小人のよつた体躯である。

顔まで伺い知ることは出来ないがゆらゆらと揺れ、腕が体の割に長い印象を受けた。

「マスターあればいかほどのサーヴァントでしょうか？」

アーチャーは実体化すると、隣にいた幹継に問う。

「ふむ……そこまで強くなれそうだ」

一心能力を読んだが幹継にはどうにもこのアーチャーが負けるほど
の能力はないと感じた。

「アーチャー。私は後ろでマスターからの攻撃に備える。お前はサ
ーヴァントとして戦え」

幹継は一步下がると辺りに気を配り始めた。

敵対するサーヴァントは恐らくバーサーカー。

靈器盤のHラーパーを引き起こした存在で間違いないだろう。

それもアインツベルンか間桐のどちらかのサーヴァントに違いない。

これは幹継の勘ではあるがこの早い時期に攻めてくるマスターは間
違いなく冬木の地理に詳しいはずだからである。

幹継は辺りに気を配りながらも、目の前で起きている闘いからも目
を離さなかった。

「ふつー。」

アーチャーにしては珍しく剣のようなものでバーサーカーに襲いか
かる。

よつな物といつのは明確な形容が難しいのだ。

剣だと思つたら、別の何かに変化する。

とにかく掴みどころのない得物だ。

幹継は自分のサーヴァントの道具の特異性を見て驚く。

向ひは武器の様なものを持つてゐる氣配はない。

「最高の展開はこのまま決着か…」

「」で決まつてしまつた。 そうであれば随分と呆氣ない幕引きだ。

勿論幹継も言葉には出しているがそんなことは微塵も思つていなかつた。

「 ッ！」

アーチャーの得物は手ごたえを感じるとはなかつた。

避けられた。

逃がした敵の気配を探つと辺りに意識を張り巡らせる。

しかし、意識を張り巡らせる必要もなかつたのだ。

いる。

先ほどの場所に敵は間違いなくいた。

同じように揺れている。

不穏な空氣を感じたアーチャーは剣を矢に変えてソレを打つ。

放された矢は寸分違ひなく突き刺さる。

そのはずだった。

「む？」

確かにゆらゆらと揺れていた敵サーヴァントは消えた。

気配も感じられない。

「やつたのかアーチャー？」

幹継からの問いにアーチャーは判然としないような表情で恐るべくと答える。

「マスターが言うように奴がバーサーカーでしたら間違いなく殺すことが出来ました」

「随分と奥歯にものが引っかかる言い方だな」

「僭越ながら。マスターも不思議に思いませんか？バーサーカーにしてはひりひりに攻撃を加えることもなくただ立っているというなど」

ふむ。額に手を当てながら幹継は思案する。

「確かに、一理あるな。まあ今夜は侵入者を撃退出来たのだからそれで良しとしようじゃないか」

アーチャー、外の監視を頼むと言い残すと、幹継は屋敷の中に入つていつた。

開幕　?（後書き）

整合性と、面白さの両立を目指して頑張ります。

少しでも面白こと思っていただけぬよう頑張ります。

319・55・35

アーチャーが追つてくる気配がない。

どうやら逃げられたようだ。

逃げられた。というより興味がなくなつたという方が正しいのか。
いや、どうも正しくないのかもしれない。

「マスター。これでよろしいのですか？」

先ほど遠坂邸から逃げ帰つてきたサーヴァントはマスターに問うた。

マスターは「クリと頷いた。

「しかし、あの大きさといい武器の多様さといいなんなかしらね
……」

マスターは呆れたようにため息をついた。

そして、血ひのサーヴァントに憐憫の視線を送る。

血ひの運の悪さを睨つかのようだ。

「失礼ですがマスター。私はそこまで頼りないでしょうか？」

サーヴァントの間ににこのマスターはあつたと頷く。

「だつてそうじやない？ アサシンなんて諜報が主な役割じやないのかしら？ 私自体も戦闘向きとは言えぬもの……」

要は同族嫌悪つて奴ね。気にしないで。とマスターである間桐巳苑は笑う。

巳苑はアサシンにこともあるうか諜報ではなく、遠坂邸のサーヴァントの撃破を命じていた。

アサシン自身その要求にはこわれか疑問を感じていた。

もしかしたら、マスターはサーヴァントの特性を理解していないのではないかと勘ぐつたほどだ。

しかし、マスターの命令である以上アサシンは少し気乗りしなかつたが仕方なく遠坂邸に赴いたのだった。

そこには奇妙な光景が広がつていたのだ。

誰か他のナニかがアーチャーと対峙している。

アサシンはそのナニかを凝視する。

もし敵対するサーヴァントだつたらばいじで殺してしまえば今後楽になると考えていた。

しかし、どうにもおかしいことにアサシンは気づく。

魔力の流れは感じるがどうにもサーヴァントとは語弊がある気がしていた。

かと言つてただの魔術師、いやどこのマスターだとしてもよりに
よつて敵のサーヴァントの前にみず
みす立つなんて馬鹿な真似をするわけがない。

「マスター実は……」

「どうしたのかしら？もしかして、奇妙な人型でも見たのかしら？」

「……どうしてそれを？」

アサシンの質問に対しても口苑は少し笑つと右腕を血の眼前に突き
出した。

「その人型つてこんな奴じゃなかつたかしら？」

そう言つと口苑の周囲からどこから湧いてきたのか分からぬほど
の蟲が現れて一つの人型を作る。

アサシンは呆気に取られていた。

先ほど見たのと寸分違わないモノがそこにはあった。

こうして屋敷で見ると、明るさからか、目を凝らして見れば顔は無
いので人間ではないと判別すること
は出来る。

後ろ姿で判別するのは難しいだろう。背格好なんて巳苑にそっくりだ。

暗闇の中では尚更だ。

なるほど、アサシンはようやく命運がいった。

先程アサシンが話してもいいのにアーチャーの姿や、武器について知つていてことについて不思議に感じていたのだ。

使い魔を送つてゐるならまだしもそのような気配も感じじるにともなくあの遠坂邸周辺にはアサシンしかいなかつた。

そう疑問に思つていたのだが使い魔として自分の分身を放つていたのだった。

「驚いた？アサシン。これでも私だつて魔術師の端くれよ。それもある人形師から受け継いだ技術と間桐の跡継ぎとして蟲の魔術。その一つを活かせばこんなことだつて出来るのよ？」

そう言つて巳苑がもう一度右腕をかざすと、巳苑の形をしていた人型は姿を変えあたかもアサシンのような体躯になつた。

「一応。動かすことも出来るし戦うことも出来るんだけど、そういうののために使う気はないわね」

巳苑は、もう飽きたのかパッと手を振ると蟲達は人型を崩してゼンカに消えた。

氣づくとアサシンと巳苑の周りには蟲など一匹もいなかつた。

あれだけの蟲が部屋にいると考えると少し不気味だ。

アサシンは柄にもなく寒気を感じた。

「さて、アサシン。ここで私達の戦略を確認しておきましょうか

「戦略ですか?」

「そう。戦略と巳苑は頷く。

「アサシン。あなたの宝具つて射程は広いのかしら?」

「いえ……恐らく相手に触れないと発動しないですね

「なるほど、必殺の宝具ともなると条件が厳しいのかしらね。まあいいわ。アサシン。とりあえずあなたはさつきの人性と一緒に諜報活動。一応私も見てるから無茶はさせないと思つけれど、殺せると判断した場合は任せせるわ

「了解しました。マスター」

「期待してるわよ?是が非でも聖杯は私達がいただくわよ

アサシンは今一度頷くと姿を消す。

「血のサーヴァント位は信じてあげようかしらね……

アサシンが消えた部屋で巳苑はそつぞく。

巳苑は幼い頃からの調教のせいで人というか他人を信じることが得意ではなかつた。

他人の善意は悪意。

忠告は甘言。

そう生きていくしかなかつた。

信じることが出来たのは妹とあの人形師だけだ。

サーヴァントなどと言われているが、アサシンは英靈に數えられる存在である。

英靈とは言わば人間より上の存在と考えてもいいのかも知れない。

そういうモノが間桐巳苑という場末の魔術師に服従するのか。

「まあ、私の得た教訓では物事はそう上手く運ぶはずはないんだけど……」

巳苑は自らの令呪を見る。

大丈夫だ。

例え偽りの共闘関係でも構わない。

本当である必要なんてどこにもない。

願いが叶つならなんでもいい。

JRの戦争が終わるその日まで。

開幕 ? (後書き)

昨日買ったoath sign聞いてますがいいですね。

序幕　？（前書き）

「んにちは。エーテルフェルト姉妹ってそれぞれ名前あるんでしょ
うかねえ……」

305・45・11

「あら、おはよハジセコマス姉さん」

妹はたつた今起きてきた姉に向かつて挨拶をする。

姉の方は寝癖の付いた髪を鬱陶しそうに搔き上げながらおはよつと答えた。

姉は席に着くとふと違和感に気づく。

朝食がないのだ。

向かいに座っている妹は自分で作つたであろう朝食を一人黙々と食べていた。

心なしか笑みを浮かべているようにも感じる。

そういうことが。

姉は舌打ちをすると渋々台所に向かい適当に朝食を作る。

昨日エーデルフェルト姉妹の召喚は成功した。

成功したのだ。

とうあえずはサーヴァントを召喚する」とが出来た。

「「問う。あなたが私のマスターか?」」

召喚陣に現れた影は一つだった。

ここまで露骨なのかと二人は相手のサーヴァントを見て笑ったのを覚えている。

傍から見ても感じる相反する二つの属性。

まさに姉妹と同じ。

善と悪。

姉妹が召喚したサーヴァントも見た目こそ同じだが纏つている空氣というのかオーラが違っていた。

金髪碧眼。

この戦時中の世の中ではそれだけで目の敵にされそうな風貌。

騎士というのに相応しい鎧。

片方のセイバー腰には鍔が大きくあたかも十字架を模した片手剣。

もう一方には黒くねじれたおいう表現が正しいよつた醜い片手剣が刺さっていた。

「ええ、私があなたのマスターよセイバー」

姉は片方のセイバーの手を取る。

それにつられて妹もむつ一人のセイバーの手を取つた。

「さて、私達は四人で聖杯でも取りに行こうかしらね

妹がそう言つと、セイバーは頷く。

妹の方は、そんなことさも当然であるかのように聞き流し皿の寝室に足を進める。

「マスター」

ようやく床に着けたかと思つた矢先セイバーに話掛けられた。

「何かしら？」

「はい。なぜ私達、いえ私は一人分として召喚されたのでしょうか？」

「そうね……きっと私達二人が一人共マスターになるのに相応しい同等の資格があつたからじゃないか

しら？」

「しかし、前回までの聖杯戦争においてこのよつなことは一度も起きてないですが……」

セイバーの質問に対しても加減面倒になつてきたのか妹はぶつくりまづに答える。

「それは前回までに私達みたいな魔術師がいなかつたからでしょ。

ところで、セイバーって姉さんのも
セイバーだから呼び方が混乱するわね……」

セイバーの方も確かに。と腕を組む。

現界した時に与えられる知識の中にこんな事態を上手く対処出来る
ような気の利いたものはなかった。

「じゃあ……あなたはセイバー・オルタ。とでも呼ぶわ」

「セイバー・オルタですか？」

「そ。オルタ。オルタナティブ。うん。即興の割にはよく出来てる
わ」

自分で考えた名前が気に入つたのかエーデルフェルトはしきりに頷
いた。

「なら、オルタ。聖杯戦争はもう始まってるわ。寝首をかかれない
ようにしましょうね」そう言つて
エーデルフェルトは目を閉じた。

そして現在に至るのである。

「ねえ、姉さん？ まず最初に誰からいきましょ？ うかね？」

妹の質問に、寝起きで頭がつまへ働かない割になんとか朝食を作
った姉は振り向く。

「さあね。何か当てはあるのかしらね妹さん？」

姉の方は柔軟な笑みで妹を見つめる。

姉が名前を呼ばずに妹と呼ぶのは自分が立場が上であるという事を妹に再確認させるための嫌がらせだ。

「…………とつあえず、私達を除く三騎士クラスの奴らを片づけながら殺してはどうかしら？」

妹はそんな姉の言葉を意に介する様子もなく平然と自らの意見を述べた。

「三騎士クラスが先？ アサシン達が先ではなくて？」

姉の方からしたら、妹の発言は意外だった。どうしてそんな面倒なことを先にやるうとするのか。

加えてアサシン達は戦闘能力が低いとはい、いや、低いが故にその他の能力が厄介なのだ。

この双子館においてはエーデルフェルトの結界が作動しているから平氣とはい、屋敷を一步出た瞬間に後ろから寝首をかかれるということもあるのだ。

「不満のようですね。姉さん。私達が得た敵陣営の情報を鑑みてアサシンとキャスターは放つておいて大丈夫かと」

「どうしてそういう言えるのかしら？」

「アサシンのマスターはこの地の魔術師である間桐の家系の者みた
いだけじ、どうにも昨日の晩にいき
なりアーチャーに闘いを挑んだらしいわよ。蛮勇もここといりね」

「それで？」

「勝手に死にそうだから無視しよう」と言つてるのは姉さん。後は
キヤスターだけれど、どうにも情報
が集まらなくて未知数。」

流石に挑む気になれないわ。と妹は肩を竦める。

妹の意見を聞いて姉は少し考えるようになり視線を下にやる。

「まあ、とりあえずあなたの意見を採用するわ」

そつ言つと姉はようやくテーブルに着き、自分の作った朝食を口に
運ぶ。

眠気覚ましに飲もうと思つたコーヒーは話してから冷めてし
まつたらしくあまり美味しくなかつ
た。

びりかして不味いコーヒーを飲み干すと姉は自分の部屋に戻つた。

「ふう」

よつやく一人だけになれたと安堵して溜息を吐いた。

「どうかされたか？マスター。妹君とはビリビリも上手くこなしている
よつには見えないのだが……」

姉は声のした方を向く。

そうだった。セイバーがいたのだ。

「セイバー。もしあなたがあのやりとりを見ても尚、『微笑ましい
姉妹ですね』など言おうもんならい
きなり令呪の使用を考えるとこりだつたわ……」

妹の話題を出されるとどうと疲れが出たのか、ぼんやりと窓の外の
景色を見ていた。

遠くの方に橋が見える。

姉妹共々日本に来たのは初めてだった。

というより欧洲から出たのが初めてだ。

冬木の街のことも知らない。

聞きかじった程度の知識では、こっちの方でも魚を食べるらしい。

他にも色々聞いた気がするがあまり覚えていない。

「ねえ、セイバー」

「なんでしょうか？」

「あなた、もう一人のセイバーとの程度まで離れて行動出来るのかしら？」

するとセイバーは少し目を閉じた。

何かを考えているのだろうか。

一分もしないうちにセイバーが目を開く。

「恐らく、高低差は分かりかねますが、この屋敷なら別々に、冬木市内ではある程度までは……」

「ある程度つて随分曖昧ね」

その言葉にセイバーは申し訳なさそうに目を伏せる。

「申し訳ありません。こんなことは過去に前例がありませんでしたから」

まあ、そうかと納得した。

そんな簡単に双子がどちらもマスターになるのにふさわしい能力を持つているはずがない。

久々に一人で見知らぬ街でも散策してみよかと思ったのだが諦めて二人で行くとするか……。

姉はそう考えると妹を呼びに屋敷の地理的に丁度対になっている妹の部屋をノックした。

「入るわよ

そう言ってドアノブを開けようとした。

開かない。

鍵をかけている感じはしないので恐らく中で妹がドアノブを回せまいと押さえているのかも知れなかつた。

「ね、姉さん。要件なら外で伺いますから、少し待っててくれないかしら……」

ドア越しに聞こえる声がどうにも真に迫っていたので姉の方は大人しくドアノブをさつと離した。

ガシャン！！

今まで必死にドアノブを止めていたが、姉が急に離したためドアノブが勢いよく回ってドアが開く。

「あ

姉の目の前に妹の姿があつた。

「ね、姉さんお待たせしました。それでなんの用ですか？」

どうにかして妹はその場を取り繕つたが心なしか顔が赤い。

「あ、えーと大丈夫？」

「あ、気にならないで……」

「まあいいわ。意外にあなたもドジなのね。それより外に行くわよ？」

「は？」

妹はようやく立ち直ったのか、姉の顔を見つめる。

いい事を思いついたというような顔をしていて気に入らない。

私もこんな顔をしているのだろうか。

そう考えると少し自分に腹が立つ。

「姉さん。ちなみに理由は？」

「決まってるじゃない観光よ。聖杯戦争が始まつたとは言えずっと家に籠つてるのも癪じゃない？」

「はあ……」

普通はそうやって作戦を練つて確実に勝利を収めるのが普通だと妹の方は考えているのだが、姉は一度決めたら動かないタイプの人間なので、今回は「ちがうが折れるしない。」

そう妹は考え、渋々頷いた。

「分かりましたよ。行きますから」

渋々姉の申し出を受け入れると、部屋の鍵を閉めた。

「それで何かアテはあるんですか？」

「ないわよ？」

エーテルフェルト姉妹は揃つて外出していた。

フィンランドでさえ目を惹いた一人の風貌は極東の大地でも人様の目を惹いた。

とこゝより注目の度合いで言つなればこちらの方が上だらう。

二人は特に視線を委意に介する様子もなく橋に向かつて道なりに歩いていく。

「あ

姉が何かを発見したらしく指をさした。

その指先には何やら釣りをしている人がいた。

妹の方は特に何も感じなかつたが、姉にとつては興味を惹いたようでそちらの方向に歩を進めた。

「すみません何か釣れるんですか？」

姉は何も躊躇することなくその釣り人に話しかけた。

一応日本語もある程度操れるから相手にも通じているだろ？が、それにも人見知りをしないといふのはなんとも凄いな。と妹は姉を見てそう思つた。

「あ？ んー。海の漁なら自信あるんだけど、どうもこいつの方はあんまりみたいでそこまで釣れてないんだよ」

ははは。と釣り人は姉の問いに苦笑いをした。

顔を確認すると意外に若そうだ。

もしかしたら同じ年位かもしね。

先ほど、漁が得意だと言つていたことからも漁師か何かだろ？

妹は姉の話相手を冷静に見定めていた。

いつものことながら姉は相手の素性などをまるで意に介さず話しかける。

そのせいか妹の方が相手を観察するのが常になつていた。

今回もその例に洩れず妹がその釣り人を見ていたのだが特に魔術師でも怪しい人間だとも感じなかつたので少し安堵する。

まだ、極東の魔術師の情報が少ないため最善手を打つことができないからである。

「お、お嬢さん、随分と美人さんだな。こんな時期に旅行とはお金持ちさんは違うな」

釣り人はそう言って笑った。

ほほ。と姉も上品に笑う。

「まあ、観光というか、少し用事がありましてね」

「ほう、用事か。ちなみにどんな用事なんだ?」

「流石に… それは言えませんわね。申し訳ありませんわ」

だよな。と釣り人は釣り人は何が面白いのか笑みを崩さない。

「ん? もしかしてあんたら最近出来たあのお屋敷の人たちかい?」

「ええ、よく分かりましたね」

「いやな、外国人が住んでそつだなって思いながら見てたんだよ

俺の勘も中々捨てたもんじゃない。と釣り人は姉妹を見て笑った。
勘がいい割には魚先ほどから竿にかかる様子がない。と妹は心中で
皮肉を呴く。

「なあ、もし時間あつたらこの魚一緒に食べるか?」

釣り人は姉の方ではなく妹の方に向いて呴いた。

どうやら妹がじつと見ていたのを魚が食べたそつだとでも勘違いしたのだろう。

「あ、いえ……」

妹が小さな声で断ると残念だ。と言つて顔をしかめる。

「さて、そろそろ釣りも飽きた。というわけで俺は帰るわ」

釣り人は釣り道具を素早くしまつと立ち上がった。

「じゃあな、お嬢さん方。俺の名前は権藤、権藤統一って言つんだ」

差し出された手を妹は握った。

「私は、エーデルフェルトとでも呼んで下さいな」

妹はその手を握らなかつた。

そして統一から視線を外す。

統一とエーデルフェルト姉妹は反対方向に歩きだす。

「あ、聞きたんだけど」

統一は振り返つてエーデルフェルト姉妹に訪ねた。

「「」まで来た用事つて実は聖杯を手に入れるとかじゃない？」

統一のその言葉は一人に戦慄を走らせた。

「どうして……」

妹の口からそう小さく洩れる。

どうして一般人がそんなことを知っているのか。

答えは簡単だ。

彼は一般人ではないのだ。

魔術師。

この聖杯戦争において倒すべき相手だったのだ。

「改めて、自己紹介をしようか。俺の名前は權藤統一。ライダーのマスターをやっている。今会ったのは偶然だ。不意打ちは本分ではない。だから俺はここで何も見なかつたことにして帰る」

そう言つと、統一はエーテルフェルト姉妹に背を向けた。

「じゃあな。もし、聖杯戦争が終わつた時にお互いに生きていたら、とびきり旨い魚料理でも食べさせ

「やめる

統一は、その場を後にした。

304 · 00 · 01

「統一。あれで良かったのか？今ならあの二人を何の苦もなく倒せただろうに」

エーデルフェルト姉妹と別れた後、周囲に人がいないことを確認してライダーが実体化して統一に問う。

確かに魔術師として考えるのならば、統一の取った行動は愚かとか言いようがない。

なぜ無防備に近寄つてくる敵を見逃すのか。そしてあまつさえ自分がマスターであることを伝えるのか
ライダーには理解出来なかつた。

「海賊王ともあらうものが、正々堂々の美学も分からぬのか？」

統一は意外そうな声を上げたが、考えてみれば海賊は不意打ちで生きるような人種であつたと統一は思い出す。

「いや、申し訳ないなライダー。しかし、これは言つなれば、お前を信頼しているから出来る芸当だぞ？」

「ふむ？」

「統一の一言が耳に残ったのかライダーはマスターの言葉に耳を傾けた。

「簡単な話で、俺がライダーならば勝てるところ自信を持っているからわざわざ手の内を明かしたんだ」

得意気にそう言つて統一の顔を見てライダーはふんと鼻を鳴らす。

「なに当たり前のこと言つてんだよ。ただの漁師の癖に

違ひないそう言つて統一は歩を進める。

ライダーには秘密にしておいたがもう一つ理由があったのだ。

確かに、あの場で一人を殺すことは魔術云々を考慮に入れずとも出来ただろう。

しかしそれは、姉妹共々俺のそばまで寄つてきてくれたならばの話だ。

「あの眼……中々の大物な気がするな」

俺と姉から一步引いて見ていたあの妹の眼が視線が統一に攻撃をためらわせたのだ。

じろじろと見ないように気を配つていたようだが、確実に見られてる。統一はそう勘づいていた。

二人とも魔術師。

恐らく姉妹と言つのだから、同系統の魔術行使するか、はたまた正反対の魔術行使するだろ？。

ともかくそこに対策がとれない以上攻撃は控えるべきだという結論に至つたために会話に興じていたのが眞実である。

それに、先程ライダーには正々堂々に勝負するのが理由だからと伝えた。

ライダーが納得したとするならば、どうやら俺は他人から見て正々堂々と勝負を楽しむタイプの人種のように見えるのである。

恐らくあの姉妹の二人共、最低でも一人はそう思つてゐるに違ひない。

むしろそうでなければ困る。

「ライダー」

統一がそう呼ぶと隣を実体化して歩いていたライダーが首を傾けることなく、返事をする。

「次にあの二人に会つた時、お前はあの二人の後ろから攻撃を仕掛けろ」

統一の台詞に驚いたのかライダーは一瞬統一の顔を覗いたが統一の横顔を見るとニヤニヤと口を歪め

た。

どうやら、ライダーも自分のマスターはどういう人種なのか認識を改めたようだ。

正直な話正々堂々といふ言葉嫌いじゃない。

己が力量と相手が力量を試す行為は素晴らしい。

しかし、それは相手が自分と同等、もしくは自分以下の場合に限るのだ。

俄かであるが魔術師になった統一は姉妹と初めて話した時こうも感じていたのだ。

自分とは魔術師としての格が違つと。

統一達はほどなくしてこの冬木の地における宿に着いた。

当然のことだがこの地に知り合いがいるわけでもないので、村の知り合いでこっちに出稼ぎに来ている人の家に居候するという形を取つた。

統一が扉を開けようとするとドアがギシギシ軋む音が聞こえた。

正直かなりみすぼらしいというか老朽化が顕著な住宅だ。

それでも雨風をしのげる場所があるのは有難いことだ。

「 む。 統一か。釣りは上手くいったか？」

家主の間に統一は今日の戦果を投げる。

魚数匹だった。

「 まあ、これだけあれば平氣だろ？」

そりやな。 と言つて家主は魚を料理し始める。

「 」の家主は統一の子供の頃から知り合いで名を首藤恭平と呼び。恭平も漁を営む家系だったのだが、早くに父を亡くし、母で漁を禁じられ仕方なく冬木の工場で働いていた。

普通ならば徵兵されてもいい年頃なのだが恭平は一度結核の疑いがかけられ日本に強制送還されたのだ。

それから現在に至るまで運よく徵兵の赤紙は届いていない。

「 今日はどうしたんだ？」

恭平が魚を捌きながら統一に話掛ける。

「 どうしたとば？」

「 やけに楽しそうな顔をしている。そういう時のお前は決まって悪い

「じつを思つてこられたんだよ」

「じつを知り田知の仲の恭平には統一の性格は見破られっこないんだ。」

統一はまあな。とだけ答えると恭平の田の前に座る。

「じれ、何が分かるか？」

やつまつて統一は恭平に令呪を見せる。

恭平は統一の手を一撃すると知りんと答えた。

「やつか……実はな」

セイジで統一は経緯を話す。

水神の加護のこと。

聖杯戦争のこと。

話を聞いた後恭平は改めて令呪を触る。

「なるほどなあ。じこさん共の旅かと思つてたがこいつてその権化があるんじや疑いようがないな。」

「どうか、じゃあつきからピコピコと感じてる視線ってのは幽霊でもなんでもなく、その統一が四駆したサーヴァントって認識でいいんだな」

そつまつと恭平はライダーの方を見る。

ライダーは靈体化しているのに場所を見破られたことに驚く。

一般人が靈体の視線などを感じ取ることが出来るのだろうか。

西洋で言つ所の悪魔払いなどが悪魔や幽靈を見ることが出来るのと同じようなものなのだろうか。

「ライダー。そんな一般人はこいつ以外に存在しないだろ? から気にしなくてもいいぞ」

色々考えていたライダーに向かつて、統一はライダーに背を向けたままそう言った。

「こいつはどうも昔から動物的勘というのか第六勘が強い。人間よりもむしろ人間以外の方が見えてるかもしねない」

「流石にそれは言い過ぎだろ。俺だつてその…ライダー? だつけるか。その人は目つきが悪い女人にしか見えない」

そう言つと恭平はライダーに向かつてほほ笑む。

その双方の眼は少し濁つているとライダーの目には映つた。

その眼の濁りがこの世ならざるモノを見据えているのだろうか。

「ところで統一。一つ聞いていいか?」

「なんだ?」

「そこまで話したつことは俺に何かやらせたいってことか？」

「察しが良くて助かる。実はその通りなんだ。俺達が動くと田立つ。街で働いてる時に何か異変を感じたら教えてくれるだけでいい」

「それだけでいいのか？」

「ああ」

意外に頼み事が少なくて驚いたような視線を恭平は統一に送る。

分かった。と言だけ言つと恭平は魚を調理し終わったのか統一達の前に出す。

「とつあえず、飯にするか

話を変えるために恭平は敢えて機転を利かせたのか笑顔で統一に語りかける。

「随分と遅い朝食だがな」

誰のせいだ誰の。そう恭平が言つと、違いないと統一は笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3951y/>

fatexx3 第三次聖杯戦争

2011年11月27日13時51分発行